古代鏡展示館春季企画展

漢王朝のやきもの

令和4年3月19日(土)～令和4年9月11日(日)

企画展解説シート　第10号

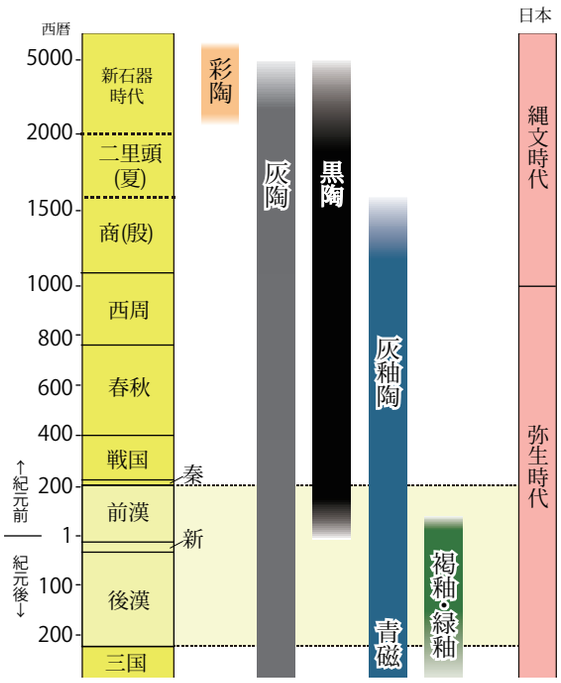
兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

多彩なやきもの

漢王朝の時代(紀元前202年～後220年)は、王莽(おうもう)が建国した新(しん)(後8年～25年)の一時期を除き、400年もの長きにわたり統一国家として安定を保った時代で、色や焼成方法等が異なる多種のやきものが作られました。

この時代には、新石器時代から続く灰陶(かいとう)や黒陶(こくとう)、商(しょう)(殷(いん))時代中頃(前1500年頃)に生産が始まった灰釉陶(かいゆうとう)が作られていました。また前漢時代中頃以降には褐釉陶(かつゆうとう)や緑釉陶(りょくゆうとう)などが流行し、後漢時代終わり頃には本格的に青磁(せいじ)が登場しました。

※〔**やきものの名称**〕日本と中国ではやきものの定義や名称が異なります。本展では、「中国のやきもの」に対して日本で一般的に使われている名称を使用しました。



やきものの変遷

青銅器を模倣した灰陶加彩龍紋鈁(かいとうかさいりゅうもんほう)(左／漢)と青銅器の鈁(ほう)(右／前漢)

黒陶

表面が磨かれ1000℃前後で焼かれた黒色のやきもの。中国では紀元前5000年頃の新石器時代に出現し、山東龍山文化期（前2500年～前2000年）や、戦国時代（前403年～前221年）に発達し、前漢時代に終焉を迎えた。

写真(右)は四川省理番県（現在、理県）の理番文化に見られる特徴的な形の黒陶で、中原（黄河中下流域）のものとは趣を異にする。

黒陶双耳壺（前漢）

灰陶加彩龍紋鈁（漢）

加彩灰陶

灰陶は、灰色の色調のやきもの。焼成の最終段階に空気を送らず、還元炎で焼き上げることにより灰色となる。紀元前3000年頃の新石器時代には作られており、漢代にも日常生活用の器として使われた。

加彩灰陶は、焼成された灰陶に赤や黒・白などの絵の具で彩色したものをいう。墓へ納める目的で、春秋戦国時代（前770年～前221年）頃から青銅器や漆器を模倣して盛んに作られ、漢時代も引き続き作られた。

写真(左)は、青銅器の鈁（横断面が方形の壺）の形をそのまま模した灰陶で、赤・白・緑・青の絵の具で龍紋などを描いている。

灰釉陶

植物の灰を水に溶かして釉薬として用いた高火度焼成（約1200℃～1300℃）のやきもの。商（殷）時代中頃（紀元前1500年頃）に出現した。後漢時代終わり頃から出現する青磁の前段階的なものとみなされることもある。

写真(右)は、漢時代の灰釉陶を代表する形の壺。

灰釉双耳壺（前漢末～後漢）

褐釉鍾（後漢）

褐釉陶・緑釉陶

鉛を含んだ釉薬（鉛釉）に酸化鉄を呈色剤として加え、800℃～900℃程度の低火度で焼成し、褐色に発色したものが褐釉陶。酸化鉄の代わりに酸化銅を加え、緑色に発色したものが緑釉陶。これら鉛釉陶は戦国時代頃に出現し、前漢時代終わり頃から本格的に作られるようになる。今日知られる鉛釉陶のほとんどは後漢時代の作で、墓に副葬されたもの。その制作は後漢時代終わり頃より急激に衰退するが、技術は後の三彩へと繋がっていく。

褐釉博山酒尊（後漢）

褐釉囷（後漢）

緑釉鍾（後漢）

緑釉熊形灯（後漢）

編集・発行：令和４年３月19日　兵庫県立考古博物館加西分館
兵庫県加西市豊倉町飯森 1282-1　TEL：0790-47-2212
03教Ⓟ 2-045A4